

### 「みどりの学術賞」受賞者が語る 森林の魅力、そして自然への想い

東北大学大学院生命科学研究科教授



4月27日、第1回みどりの式典において、天皇陛下か ら「おことば」を賜りました

では、

面真つ白な世界に包まれま

雪が積もり、十二月半ばから三月ま になると、毎年二メートルくらいの

僕は新潟県長岡市の出身です。

ひどいときには、一日に三回も服を 楽しいことのように感じられました を出す。それが子ども心に、美しく だった世界に、カタクリや山菜が顔 ようやく春を迎えると、無彩色

年たっても薄れることはありません るような感動は、研究を続けて三○

### 待ち遠しかった少年時代 草花が芽吹く春が

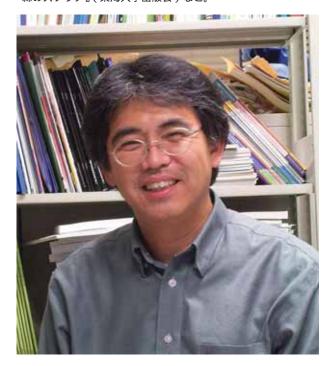
すが、都会に住む子どもが僕と同じ ような体験をもつことは難しいかも 環境教育の必要性が議論されていま 気づきました。 をきっかけに、自然のおもしろさに 固有の植物を教えていただいたこと 本格的に森林に興味をもったの 中学生のときです。理科の先生 植物図鑑には載っていない地元 今、子どもたちへの

うな子ども時代は、 恵まれた環境だったのでしょう。 着替えるほど、野山で遊びまわるよ 今から考えると

僕も、学生たちには「まず外へ出よ 然のおもしろさに気づくものです。 かで過ごした経験をきっかけに、自 ちょっとした働きかけや、森林のな しれません。でも子どもは、

### 中静 透(なかしずか とおる)

1956 年新潟県生まれ。千葉大学卒。理学博士。森林総合研究所 主任研究官、熱帯農業研究センター主任研究官、国際農林水産業 研究センター主任研究官、京都大学生態学研究センター教授、総 合地球環境学研究所教授、人間文化研究機構総合地球環境学研究 所教授を歴任し、現職の東北大学大学院生命科学研究科教授に。 専門は森林生態学、生物多様性科学で、温帯落葉広葉樹林の動態 と更新、熱帯林の動態、林冠生物学などを研究している。著書に 『森のスケッチ』(東海大学出版会)など。



う。

# 生物多様性の保全を考える 樹木の一生を見つめながら

ひとつはマレーシアの熱帯林におけ る生物多様性の研究です。 五〇メー 現在の研究についてお話すると、

> に林冠についての調査を行っていま メートルのクレーンを使って、一・七 トルの木々を見下ろせる、高さ八○ クタールの熱帯林を俯瞰し、とく

もうひとつは、これも生物多様性

的に考えるために、植物・昆虫・鳥 そして、多様性の保全をより多角

ジェクト活動を行っています。 から考える専門家が集まり、 プロ

森林の利用を人間の側

## 森林を「使う」という発想が これからのキーワードになる

天皇皇后両陛下ともお話をさせてい がったことは今でも印象に残ってい お詳しい天皇陛下から、研究者らし ただきました。生物の分野にとても 驚くばかりでしたが、 いご質問をいただき、お話が盛り上 とだと感謝しています。 受賞の一報を受けたときは、ただ 大変光栄なこ 授賞式では

弥彦山のフィ

私たちは森林とのつき合い方を考

平洋側の森にはないのか、といった 死んでいくのかという、生命表をつ らい種をつけ、どのように成長して いかけています。一本の木はどのく の研究に関連して、 たくさんの種が共存できる条件とは ようなことを調べる過程を通して、 にはブナばかりの森があるのに、太 なにかを研究しています。 くります。さらに、なぜ、日本海側 樹木の一生を追

ときにバイオマスエネルギー であ どのように使うのか。その財産とは 無形の財産を、我々がいかに見出し い里山の創造です。 僕の今後の目標のひとつは、

ればと思っています。 い方を考える契機にな 自然との新しいつき合 たい。それが、人間と いくかを提案していき の生活にどうつなげて けることによって人間 をもっとたくさん見つ の空間でもあるでしょ り、ときに癒しとして その現代的な価値 内閣府 みどりの学術賞 ホームページ

http://www.cao.go.jp/midorisho/index.html

るだけでは、全国の里山を管理する なってきましたが、その力に依存す ます。ボランティア活動も盛んに への関心を失うことにつながってい ていました。ところが、 られる理想的なシステムが成り立っ る落ち葉を集めることで環境が整え ます。 たとえば今注目を集める里山 える大きな分岐点にきていると思い ことは不可能でしょう。 燃料にする薪を拾ったり、肥料にす ですが、昔はそこで生活をする人が 人の生活が切り離され、それが森林 今は森林と

里山のもつ有形 新し